

目次

朝のご飯はいつだってパン 篠田くらげ

咀嚼 笹谷香菜

淡竹とバイ 古井久茂

ご機嫌伺い 豆崎豆太

三十路リーマンと少女の春。 ボンゴレーノ麴

ギャラクシー船団の1 cup tea time 中森つん

派遣料理人の戦場レシピ『ダツカー鶏の丸焼き』 巫夏希

姫の晩餐会 Primo tavola 奈月遥

参加者一覧

朝のご飯はいつだってパン

篠田 くらげ

世の中には二種類の人間が、などと言えば陳腐になってしまうけれど、とにかく二種類の人間がいる。パン党と、それ以外だ。それ以外にはご飯、ラーメン、食べないなどが含まれるが、そんなのはいい。朝はパンに限るのだ。トーストの幸せな匂い、菓子パンの安いのにそれなりの豪華さ。午前の私はこれで決まる。

さあ、今日も出かけてこよう。

明け方にトーストを焼くネクタイの赤さを指で確かめながら



咀嚼するわたしを見ても恋をしていられるのなら手をつなごうか

若い時分のあだ名のひとつに、
「クリオネ」というのがあった。

食事の際に大口を開け、もりもり
飲み込むさまがクリオネの捕食姿に
似ているというのである。

おしとやかな食べ方を模索してみ
たこともあるが、食べ方に気をとら
れて食がすすまず、結局は気にせず
もりもり食べる方を選んだ。

困るのはデートである。なんせク
リオネだから、食事中はちょっと怖
い。顔面にモザイクが要る。

そういうわけで、モザイク代わり
の扇子を用意してデートにむかった
ことがある。昔ながらのおひいさん
のごとく顔面および口元を隠しつつ
食べればよくない？わたし天才！と
思って用意はしたものの、手をつな
ぎながら食べるソフトクリームでは
どう扇子をもつべきかいっこうにわ
からない。そわそわしてたら思いっ
きり笑われた。

仕方ないから、今日まで自他とも
に認めるクリオネのままである。

せめて人間になりたい。

※この文章はイメージです。

生きてゆくのはつめたい冷蔵庫です
ね卵をめちやくちやに割る

淡竹とパイ

—— 古井久茂

「どうかされましたか」

喉を通るさらりとした熱が甘みになり、鼻の奥

「今日はお一人なんですね」

に届く。カップに残る濃い金色からは、今もウツ

「はい、そうですが、弊社の他の者にご用がおり

ディなワインのように甘い香りが俺のところまで

だったでしょうか」

漂う。ああ、ダージリンのセカンドフラッシュはこ

波箱さんは俺の向かいの席に静かに腰かけた。

うでなくてはならない。

それから、俺の顔を睨めあげる。

「お待たせしました、日越さん」

「どこに行ってきたんですか。靴が泥だらけです

視線を上げた先には、スーツ姿の波箱さんが

よ」

立っている。いつもより少し化粧が濃い。

「ああ、ここに来る前に淡竹を採ってたんです」

「本日はご足労ありがとうございます」

「それ、何ですか」

カップを置き、立ち上がってお辞儀した。頭を

「タケノコです。孟宗竹よりサツパリしているんで

上げると、波箱さんは下を向いている。

すよ。採ったその場で一本味見してみましてね、

もう夜が楽しみです」

「そんなこと、よく会社が許しますね」

「ベンチャーだからでしょう。フリーランスの波箱

さんでもやれるじゃないですか」

「そういう問題じゃありません。それに、ネイ

ビーのストライプにスエードの靴なんて、ビジネス

スタイルじゃないですよ。怒られないんですか」

「今日は直行直帰ですから」

「うわ、最低」

俺は笑いながらイスに座る。カップの紅茶を飲み干す。その間に波箱さんはウェイターを呼ぶ。

「サーモンとゴボウのパニーニをお願いします。あ

と、飲み物はこの人と同じ物を」

俺はタブレットをカバンから取りだし、会社のサイトにアクセスする。社員番号とパスワードでログインして企画書と仕様書案を呼び出す。

グローバルゼーションは特色を手放すことではない。グローバルスタンダードは合わせる対象ではなく、局所局所の現状を知るために使うべきだ。そして、そうして洗い出した特徴を元に、徹底的に

ローカライゼーションを進めることで、やつとグ

ローバリゼーションに辿り着く。たとえば食べ物なんかは地産池消が叫ばれるようになった。それは

ある意味で正しい。貨物船で運ばれてきた生野

菜などは、大きな輸送コストがかかるだけではな

く、野菜自身が生きていくために様々な栄養素

と旨味を消費していく。結果、口に入るときには

脱け殻のような野菜になってしまう。しかし、比

較対象はそんな生野菜でいいのだろうか。収穫さ

れた直後に急速冷凍された野菜は、栄養素や旨

味成分が保存されたまま細胞壁が破壊され、加

熱調理に適したものになっている。そんな冷凍野

菜と比べたときに、その地域地域で採れる野菜の

特色が見えてくる。比較対象を間違えてはいけ

ない。安くて新鮮で包丁を使わずに素早く炒飯

を作るのに冷凍野菜を使うのを咎めるのなら、

それに勝る特色を見いださなければならぬ。自

分で淡竹を採ったという物語は、採ったばかりの

淡竹の皮を剥いて齧ったという体験は、冷凍タケ

ノコにはない価値を有している。今回の企画がう

まくいけば、そんな意識を町内会で共有できる

インフラシステムが構築できる。情報インフラを整

えるだけなら、大手の無料サービスを取り入れる

だけでできる。しかし、俺がやりたいのは情報イン

フラを整えることではなく、意識のインフラを整

えることだ。

「波箱さんの作ってくれたシステム、使いやすくて

好評ですよ」

波箱さんは「そりやあどうも」とテーブルの下で俺の靴を蹴った。

社内システムと町内会で使うインフラは違う。

だからこそ、その違いを明示的にして開発者に伝えなくてはならない。

俺が波箱さんに視線を向けると、波箱さんは

頬杖をついて顔を横に向けた。それから、チラッ

チラッと二回ほど俺の顔を見る。

「そのタケノコって、沢山あるんですか」

「ええ、楽しくなって多めに採っちゃいました」

「日越さんのところに小豆貝を買って持って行ったら、ふたりで一緒に楽しんでくれますか」

「小豆貝、バイですか。いいですねえ。淡竹とバイ、

旬と旬。もちろんです。喜んでお待ちしておりますよ。

そうと決まれば仕事なんて早く済ませちゃいま

しょう」

俺はタブレットをクルリを回して波箱さんに向

ける。波箱さんは、唇を軽く噛んでいた。

短歌×ミード企画！

サークル fulidom では、短歌とミード(蜂蜜酒)の企画を進めています。

多数の豪華ゲストを迎え、第一回文学フリマ札幌(2016年7月23日・さっぽろテレビ塔2F)にて初お披露目します。

乞うご期待！

詳細はツイッターアカウント @fulidom にて

ご機嫌伺い

豆太

飲む。今日は絶対に飲む。

怒涛の一週間が終わった金曜日、エナメルパンプスの踵を鳴らしながら田上春奈は心の中で繰り返した。今日は飲む。泥酔するまで飲む。決めた。

その足で二十二時までやっている酒屋に向かい、以前飲んで気に入った安ワインのボトルを買う。ついでフレークタイプのチーズと雑なベーコンの切り落とし。営業時間の長いスーパーの野菜は決して安くはないけれども、飲むと決めたのだから仕方ないと割りきってじゃがいもとトマトを買う。

鍋に水、洗ったじゃがいも、冷蔵庫の中で死にかけていた卵を入れて火にかける。一人暮らしのキッチンは狭く、電気コンロは一口しかない。シンク

に渡したアルミの水切り台にまな板を置き、トマトを切る。トースターは小さく、そこに収まる皿を選べばトマトは一つで十分だった。皿にトマトを並べ、チーズを掛けてトースターに放り込む。

酒好きの一人暮らしだから春奈はコルク栓のワインも簡単に抜くことができる。花のような香りのするワインは、それだけで若いものとわかる。狭い収納にコップはかさばるから、春奈はコーヒーも水もワインもマグカップで飲む。同じく酒好きの同僚に言ったら嫌な顔をされることだろう。

茹で上がったじゃがいもと卵を鍋ごとシンクの方に移す。コンロにフライパンを温め、ベーコンを焼く。ゆで卵とじゃがいもの皮を向き、熱いうちに木べらで潰してチーズのフレーク、焼いたベーコンと混ぜて胡椒を挽く。トースターの中ではトマトが冷め始めている。

ばかみたいない週間だった。論理や計画性というものが存在していなかった。

た。無益な作業で心地いい疲労は生まれえない。会社とは利益を追求する組織なのだから、仕事だってもっと利益に対して真摯であるべきなのだと思う。出来上がったポテトサラダをひとくち食べて、春奈はにんまりと笑った。おいしい。とてもおいしい。

お酒を飲める年齢になって五年が経ち、今や春奈は自分の機嫌の取り方をほとんど正確に把握している。その手段はひき肉と玉ねぎ、人参がたっぷり入ったオムレツであったり、鮭と舞茸とごぼうの炊き込みご飯であったり、好き勝手に唐辛子と山椒を使った麻婆豆腐であったりする。そうして春奈は概ね上機嫌で暮らしている。

三十路リーマンと少女の春。

ボンゴレーノ魏

るんたった。るんたった。

視線の先は随分と下。小さなつむじから出た一房の髪の毛が揺れている。二つ結びから飛び出したご愛嬌。

四月上旬の日曜日ともなれば、桜を見ようと関東のあちこちでレジャーシートも花咲く頃。川沿いに桜が植えてあるこの地区では、毎年桜の開花に合わせてライトアップも行われている。しかし目の前を歩く小さな姿は、きつと夜のライトアップの頃には眠りの中だろう。

くあ、と気だるく欠伸をすれば、頭上にある太陽と、足下の大きな瞳から批難されたように感じた。誤魔化すために肩を竦めて喋りかける。

「あんまりはしゃぐと転ぶよ」

「ころばないよー!」

弁当箱の入った包みを大事に両腕で抱えながら言う少女の姿を見て、すれ違った二人組の女性がクスクスと小さな笑いを零した。彼女たちには、この小さな存在が自分の娘と思われることだろう。

少女は自分の娘ではない。更に言うなら、親戚でもない。

「あそこあいた!」

「はいはー」

肩掛けのポシェットからプラスティックのおしぼり入れを覗かせている彼女は、自分の高校時代の後輩の娘なのである。

互いにアラサーへ手が届く年齢。大人になるにつれて少しずつ希薄となっていく予定だった縁が、不思議なことに繋がり続け、月に一度はこうして面倒を見てやっている。

後輩夫婦はどちらも高校時代から知っているのだが、夫婦揃って激務に追われているのは今も昔も変わらない。面倒見がいいというか、苦勞性というか。小学校に上がったばかりの娘をかまっていりたくても、周囲がそれを許さない。詳しくは割愛。休みの日にも仕事の話なんかするもんじゃやない。

「ここで食べよ!」

ぴよん、と空いたベンチへすかさず飛び乗る。太い丸太を模したベンチの上で、少女は早くも弁当の包みをほどき始めた。

「はやくー」

「あいよ」

お姫様のエスコートを受けて、ベンチに腰を下ろす。すると、アルミホイルに包まれた丸いものを二つ乗せられた。おざなりにありがとうと言いながら、自分の持っていたバックパックから水筒を取り出す。ぬるめに作ってある麦茶をコップに注いで、渡してやった。

「ありがと!」





「ん」

コクコクと麦茶を飲む少女の横に、ひらりと薄紅の花びらが降ってくる。見上げれば、見事に咲いた花々が青空によく映えていた。

「ママと作ったんだよ」

「へえ」

その声で視線を引き戻す。示された先は、おにぎりだったらしい、先ほどのアルミホイル。自分なら一口で食べきってしまえそうなおにぎりは、なるほど彼女の小さな紅葉で作ったものか。

「こっちはパパ」

「だろうね」

形がいびつな卵焼き。それでもここにこと笑いながら、剣の形のつまようじでこちらに差し出してくる。

「……いただきます」

「はい、どーぞ」

大人しく口の中に放り入れてもらった卵焼きは、少し香ばしかったが、それもアクセントになって中々に美味い。

少女の口の大きさに合わせて小さくされた、アスパラの豚肉巻きとフライドポテト。プチトマトは、瑞々しく太陽の光を反射している。ばらんで仕切られた、ごぼうのきんぴらと、茄子の素揚げ。統一性の無いそれらは、作られた時の熱をすっかり失っていて、弁当箱の中で静かに整列している。

冷たい食事は、寂しいものの象徴だと思ふ時がある。飲み込んだ後に、そうっと胃から立ち昇ってくる陰りと心細さ。

けれど弁当というものは不思議で、冷たいのに、特別だ。口に入れても、それは淋しさを引き連れてはこない。弁当は食べる相手を想って作る分、何もかもがあげすけに伝わる。

「パパとママも、きたかったかなあ」

アルミホイルを剥がしながら、少女が呟く。ほんの少し、唇を尖らせて。

ほら、こんな少女にも全部伝わっていた。

「また来ればいい」

「うん！」

元気よく頷いて、少女はチキンライスのおにぎりにかぶりつく。ポシエットの中にあるおしぼりのことを失念していたけれど、仕方が無い。少女に合わせて作られたおにぎりに、自分も歯を立てる。やっぱり自分には一口だ。

ごくんと飲み込めば、少女の輝く瞳と視線が合った。

「ねえ、おいしい？」

「おいしいよ」

「やったー！」

少女の明るい声が青空に響く。桃色に染まった両頬は、きつと桜餅みたいに柔らかいのだろう。

【終】



★ ギャラクシー船団の1 cup tea time ★

一杯のお茶をどうぞ。

珈琲にしますか？

紅茶にしますか？

当店ではお客様の様々な症状に合わせたオリジナルブレンドティーを提供しております。

一杯のお茶をどうぞ。

それからゆっくりお話をしましょう。

一杯のお茶があなたの心をあたため終えるまで、わたくしはお付き合いたします。

さあ、こちらの席へどうぞ。



★人に優しくするブレンド★

ガーネット姉さんの天然水…二〇〇ml

ペリドット父さんの混成酒…五〇ml

天の川のほとりのカスミソウ…二輪

チェシヤ猫のしましま尻尾角砂糖…二個

アールグレイ茶葉…大さじ一杯

☆

がさがさの気持ちをまっさらにして、とても穏やかな心に導きます。

天の川のほとりのカスミソウは、清らかなエッセンス。

その優しさが溶けていきます。

あなたはきつといま、誰かに笑いかけたくなっているはず。

そんなときは、チェシヤ猫のようなちよつぷりいたずらっこの笑顔を。

どうぞ楽しい一日へ、いつてらっしやい。

☆

★自分に厳しくブレンド★

ダイヤモンド兄さんの炭酸水…二〇〇ml
オパールおじさまの蜜酒…三〇ml
天の川のほとりのスイセン…一輪
猫のかぎ尻尾の黒砂糖…大さじ一杯
アッサム茶葉…大さじ二杯

☆

このブレンドはとにかく辛い！
飲み終えるまで平均三時間かかります。
どうしましたか。

上司がつかえない。

部下がさらにつかえない。

他人からの評価が気になる。

甘えられない性格。

だいぶお疲れですね。

どんどん愚痴を吐いてください。

☆ 銀河三角コーナーに捨てておきますから。

★ツンデレーションマジック★

ローズクォーツ詩人の湧水…二〇〇ml
エメラルド母さんの醸造酒…五〇ml
天の川のほとりのアジサイ…一輪
トゲトゲ海峡の金平糖…好きなだけ
ギョラクシー船団秘密茶葉…適量

☆

いつもツンデレなあなたにおすすすめ。
色んな自分を知られて、幻滅されるのが怖いのでしよう。

どうしても優しくなれない自分が、大嫌いなのでしよう。

でも大丈夫。

あなたの大切な人たちは、本当のあなたがとても泣き虫だということを知っています。金平糖のとげとげが丸くなるまで、ゆっくり素直になれますよ。

☆

派遣料理人の戦場レシピ『ダツカー鶏の丸焼き』

——戦場において唯一といえる娯楽は何か？

賭け事？ 仲間との話し合い？ 兵器のメンテナンス？

確かに、そのどれかが娯楽と言える人も少なくないかもしれない。

しかし、それを世間一般で言うところの『娯楽』と結び付けられるか——と言われると疑問符を浮かべることだろう。

鉄板に油の弾ける音が調理ルームに響き渡る。調理ルームは普通の厨房と比べると一回り小さい。それは彼女一人で歩き回るにしては充分な大きさと設計されているためだ。

とはいえ、普段は——正確に言えば彼女以外の料理人が派遣された場合は——少なくとも四人が居ないとこの基地に居る兵士のお腹をスムーズに満足させることは出来ないだろう。

「おばちゃん、今日の料理は何？」

「今日はダツカー鶏の丸焼きだよ！　　というかあんた、暇なの？」

スカートで頭を包んだ女性は鉄板でじゅうじゅう音を立てている鶏肉の塊を菜箸で動かしながら、カウンター越しに話をしている兵士に言った。

なぜ兵士かと言うと、この場所は戦場だったからだ。現に今も砲弾の音、爆撃の音、指揮をする兵士の声が至る所から聞こえてくる。

まさに戦争の真只中。

それにも関わらず、この兵士は調理ルームに居た。「……暇、というわけじゃないんだよね。何というか、

今の戦争ってこういう風に食事をする余裕だって出てきたわけだろ？　それってつまり、暇な兵士が幾らか出てきてもおかしくない、というわけ」

「働きアリの原理かしら？　……まあ、それはいいわ。」

もし暇だったら手伝ってくれない？ 急に料理の変更を言われてしまったものだから、皿を拭く時間も無くて。もし忙しいのならば別に任せることはしないけれど」

「いやいや、大丈夫ですよ。俺は忙しくないから」

そう言って兵士はすぐ横にある扉を開けて、調理ルームの中に入ってきた。

「あ、あと消毒液をきちんと両手につけてから作業してね。戦場で食中毒なんて起こされたら溜まったものじゃないし、たとえ私が悪くなくても私が悪くなるのよ。それくらい理解してほしいものね」

「……解っていますよ、それくらい」

そう言って兵士は扉横のテーブルに置かれている消毒液のボトルをプッシュして、自分の手に消毒液を何滴か垂らした。垂らした後はそれを両手に馴染ませていく。馴染ませた後はそれを見せつけるように女性の居る方向に突き出した。

「はい、これで問題ないでしょう？」

「常識の範囲内の行動を、自慢するんじゃないよ。皿を拭く専用のタオルは食器棚のところに掛けてある

やつを使ってね。もし床に落としたらそれを洗濯カゴに入れて、両手を消毒してから、新しいタオルをとること。いいわね？」

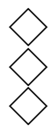
「大丈夫ですよ。もう二回目ですよ。それくらい、言われなくなつて……」

「何度も言っておかないと、仮に出来なかった時が大変でしょう？ だからこそ、私は何度も言っているの。だって私がこの厨房の管理を行っているのだから」

「そうですね……。まあ、まじめなことはいいことですよ。少なくとも不真面目なほうよりかは問題ないと思いますし」

兵士は大量にある皿を拭くべく、タオルを手に取りつた。

それを見ていた女性は、ようやく作業を再開した。



料理が完成したのは、それか一時間後のことだった。そのころにもなればソースの匂いで兵士の胃袋は音を鳴らしていた。

「ねえ、ちょっと味見してもらえるかしら？ ソースの味付けはどうも私一人で決めるのは良くない気がするのよね。やはり実際に食べる兵士の人たちに味を見てもらわないと」

それを聞いた兵士は「はい！」と大きく声を出して、もともとあった場所にタオルをかけて女性の前まで向かった。

女性の前にあるテーブルにはすでに鶏肉のスライスと、それにこげ茶色のソースがかかっていた。ソースは温められているのか、湯気が出ていて、そしてとても美味しそうな香りがする。

「いただいて、いいのですか？」

それを聞いて女性はこくりと頷く。

「そのために君を呼んだのだからね。どうぞ食べてくれたまえ」

そして兵士は鶏肉のスライスをフォークで刺すと、そのまま口に入れた。

口に広がる塩気と、それから少し遅れて感じる刺激。どこかフルーティな香りもする。

「……どうだ？」

「これ、フルーツとか使っている感じですか？ とってもフルーティな香りがしますけれど」

「そう。さすがだね、これにはリモーヌという爽やか系……酸味を追加するためにそれを利用した。ほかに？ ほかに気付いたポイントは？」

女性は目を輝かせて兵士に訊ねる。

兵士は目を瞑り、考えながら、ゆっくりと言葉を紡いでいく。

「ああ……あとは塩気が良い感じですね。これは魚醤ですかね？ 魚の香りがするとか、なんとなく、ではありますけれど……。海が近いところに住んでいた僕にとっては、これはかなりいいなあ、って思いますよ。特にここは砂漠のど真ん中ですからね。ただ、塩気を少し強めにすればいいのかなあ、とは思いますが」

「塩気が強め、ね……。私としてはけっこういい感じに強くしたのだけれど、まだまだ足りないということね。まあ、確かに兵士のみんなは汗をかくから、塩分を消費するし、仕方ないか……。よし！ ありがとう。あとはいいわ、夕食のタイミングを楽しみにしてね！」

そうして兵士は再び皿を拭く作業に、女性は兵士から言われたポイントを修正すべく調理を再開した。



夕食の時間。

兵士にとって娯楽ともいえる時間である。

その時間になると食堂はすぐに満員になる。入りきれなくて列を作っている兵士も居るほどだ。

そうになると食堂は大盛況になり、女性一人では正直こなすことは出来ない。……それが普通の女性ならば、出来ないとはつきり言うことだろう。

しかし彼女はほかの人間に調理を任せることは出来ないとして、一人だけで厨房の運営を賄っている。

軍部は何度も増員を検討しているが、彼女のほうからそれを断っているの、人を増やしようがない。

「いや、今日も美味しかったね！ 味付けが濃くて、ライスにぴったりだったよ」

食器の返却はセルフとなっているので、兵士自らが返却口までもっていくスタイルとなっている。

そこで兵士は、女性に向けてそう言った。

女性はルーティンワークをこなしながら、兵士の言葉に笑顔で頷く。

彼女にとって、人が喜んでもらえることは自分が嬉しいことと等しいことだった。

そしてそれは、皿拭きを手伝った兵士も知っていた。

そして、兵士は。

(やっぱり、かっこいいなあ……)

その姿に、ひそかに恋をしていたのだった。

派遣料理人に恋をすることは何ら間違っていないが——戦場では恋愛という経験は皆無なのだ——そもそも彼女の名前など、兵士は知らなかった。

そのあと、兵士はある些細なことをきっかけに、派遣料理人の名前を知ることになるのだが——それはまた、別の話になる。

終わり

姫の晩餐会

奈月遙

【Primo tavola】

それはロキガルド帝国がまだ最盛期の半分ほどの領地であり、帝国暦にして七百年頃の話と伝えられている。

そこは冬には雪に埋もれる森の中であり、ひっそりとした屋敷であった。黒森の迷子と誰もが成り果てて飢えてしまうその奥に、全ての無駄を省いたような外観をしてどつしりと構えた屋敷はあった。

その屋敷を目指す人は後を絶えない。道もなく、人の方向感覚を呆気なく飲み込み、さんざん苦しめて嘲笑って外へと放り出すその森へ、何人も入っていった。

何故か。

それはひとつの伝承を求めたからだ。

曰く。

その屋敷では、あらゆる食材が最高の料理となつて出てくる。

その屋敷の主人は、至高の料理人なのだ。

*

そう語られる屋敷の主人たる姫は、火にかけられながらも、泡一つ噴かずに、揺れもしない、静かな寸胴を、緑灰の瞳で見つめていた。

「エルバ、そろそろ着くようだよ」

魔法使いにその深く低い声をかけられて、姫は亜麻色の髪を揺らして振り返った。

半透明な幽霊じみた魔法使いは、その手の中に浮かんだ湧水のように透明な宝石をのぞくように促してくる。

そこに映るのは、猛吹雪で視界のほとんどが埋め尽くされた外の情景だ。映る景色は、一匹の馬を追って、流れていく。

木々の様子からして、もうこの屋敷のある森に入っており、外の人間達にはわからないだろうが、姫にはその客人が屋敷のすぐ近くまで来ているのだと理解出来た。

「迎えに行くわ。アエテル、火を見ていて」

「ああ、任せたまえ、我が愛する姫よ」

姫は鍋で温めているブロードを魔法使いに託して、調理場を後にした。

姫の華奢な足が長い廊下を進む。

二度の曲がり角を抜けて、やつと玄関が見えた。男性二人分の高さはある門の前には、既に執事が控えていた。

執事は切れ長の目に納まった空色を、一度だけ姫に向けて、すぐにまた直立不動となった。

「アエテルが、もうすぐ客人が到着すると言ったわ」

姫は執事を見あげて、そう告げた。

執事はそれに一拍の間も置かずに応える。

「応接間の暖炉は十分暖まっています。食堂のセツティングも、魔法使いの殿の言う通り一人で準備してあります」

「ええ、貴方の準備なら問題ないでしょう。……来たわ」

姫の言葉に合わせたかのように、門が激しく叩かれた。何度も、何度も、繰り返す。

その激しさに、そして途切れることのないことに、必死さと懸命さが感じられる。

姫が執事に流し目を送る。

そして執事は小さく頷いて門を開けた。

開いた門の先にいたのは、何重にも毛布を体に巻いた青年が一人、その腕に抱かれた子どもが一人、そしてその後ろに控えた息の荒い馬が一頭。

颯爽と、廊下の奥から、人影が姫と執事の横を抜ける。

「馬小屋に連れていく」

ぼそりとその農夫は言つて、主である姫の返事も待たずに馬の手綱を引いていった。

農夫は、馬でもなんでも、生き物のことなら誰よりも詳しく誠実だ。任せておけばいい。

そう判断した姫は、まだ吹雪く中にうずくまっている青年へ目を向ける。その腕の中にいる誰かは、毛布にくるめられて、息が出来るのかも疑わしい。

それほどまで寒さを遮断するのに気を使わなければ、目の前の吹雪の中では凍死してしまうということを、如実に表していた。

姫が門に向つて五歩足を進めた。門の境界の直前、屋敷の中の限界に姫が立つ。

青年と姫の視線が真つ直ぐに交わった。

「どうか……」

青年の口から震える言葉が漏れた。

「どうか、これをこの子に食べさせてください……!」

切迫した声だった。

青年が差し出したものに、姫は視線を落とす。

そこには、黄金があった。

林檎の形をした黄金だ。

あるいは、黄金で出来た林檎だろうか。

しかし、そのどちらも間違っているというのを、姫は聞いていた。

「まずは、体を暖めて。応接間の暖炉には火が入っているから」

姫は穏やかに青年に告げて、案内をするために踵を返そうとしたのだが、それは出来なかった。青年の冷たい

手に腕を掴まれて、動きを止めざるを得なかったのだ。執事の体が緊張し、今にも掴みかかりそうな気配を漂わせて、青年を牽制する。

しかし、そのあからさまな態度も意識に入らないのか、青年はいっそうの真剣さを増して声を上げた。

「どうか、これをこの子に！」

青年の視線は心臓が鷲掴みにされるようだった。

姫はその寒さにかじかんでいる青年の手を優しく包み、さする。

二人の距離が近くなったことで、姫は青年に抱かれた子どもを垣間見ることができた。ハニーブラウンが綺麗な、あどけない顔をした少女が死んだように眠っていた。年は十を越えたか越えないかといったところか。

「わかったから。必ず最高の料理として出すから。まずは暖まって。貴方も生きることを諦めないで」

姫は青年の手を引きつつ、屋敷の中へと招く。

その後ろで、執事が静かに門を閉めた。

青年はもう黙ったまま、姫に案内されていった。

*

その少女は、暖炉にあたる青年の腕の中で目を覚ました。

パチパチと、暖炉で薪が爆ぜる律動に合わせて、そのまつ毛の長いまぶたを瞬きする。

彼女は辺りを見回して、首を傾げた。見慣れない場所で混乱しているようだ。

彼女に、青年が二、三言なにかを伝え、執事が恭しく礼をしてその説明を引き継いだらしい。

そんな様子を、魔法使いの持つ透明の宝石越しに見て、姫は安堵の息を吐き出した。

「それで、あれは本物なの？」

姫の問いかけは、半透明の魔法使いの方ではなく、何もない空間に向かってされた

『俺もそいつから聞いた時は信じられなかったが、一目見りやわかる。あれは間違いなく神々に常若をもたらした黄金の林檎だ』

回答は、酒焼けしたような声で姫の頭に直接響いた。

目には見えない仲介者だが、その見る目は本物だ。だからこそ、真偽を確かめるために姫はその回答を求めた。

そして、わかったからこそ、新たな疑問が生じる。

そんなものをどうやって手に入れたのか。

永遠に腐らず、売れば一生暮らせるだけの金を得られるそれを、何故あの少女に食べさせたいというのか。

ただ、そのどちらの疑問も、姫には関係なかった。彼女はあくまで食べ物を恵んでもらい、そのお返しとして

料理を振る舞う者だから。

その在り方は、けして変わらない。

湯煎で温めたミルクを二つのカップに注ぎ、姫は今日のメニューを頭の中で確認する。

「お客二人とも、席に着いていただきました」

そのタイミングで執事が厨房に入る。ちようどいいとは、この男の行動にこそ相応しい言葉だ。

「アペリティーヴオが出来たわ。飲み頃は三分後、必ず四口は勧めて」

「かしこまりました。ただ、あの二人の冷え方ですと、なるべく飲み干すようにしたいと思います」

「問題ないわ。よろしく」

必要事項を交換して、姫は勝手口から外へ出て、執事はトレーにカップを乗せて食堂へ向かう。

外へ出た姫は、硝子の器を手にしており、雪へ片手持ちのシャベルを突き刺した。

ザク、ザク、ザク。

三度雪を掬い、器に移すと、即座に姫は厨房へ滑りこむ。

その短時間でも肌が凍り付きそうになるのに、本当にあの二人は過酷な状況にいたものだと思う。端的に言えば、正気を疑ってしまう。

そして、その疑いは、透明の宝石を覗き込んだ時に、

思わず頬を噛むほどに、姫の胸で大きくなった。

二人とも、全くカップに口を付けていなかった。

*

「どうか、召し上がってください」

慇懃に執事はその食前酒を——もつとも、片方は年齢のために酒ではないが——勧めた。手本通りの給仕であり、帝都のバトラーでさえ、その振る舞いには嫉妬を覚えるだろう。

それでも、青年は黙したまま微動だにせず、少女はちらちらと青年の様子をうかがっていて落ち着きがない。

食堂の飾りつけは完璧だった。シンプルながらも、真白い清潔感のあるシートとカーテンで布は統一され、テーブルフラワーは、ふわりと膨らむオレンジが穏やかに心暖める薔薇を真ん中に寄せて、ポインセチアが台座となり、グロリオサが火のように揺れる花びらを魅せる。

黙ったままでも進んでいくように、執事が配慮したものだ。

応接間で十分に暖まり、ここまで足取りもしつかりしていたのだから、まさか手がかじかんでカップが取れないということもないはずだ。

「私は、この子にあの林檎を食べさせてほしいと頼んだ

のだが」

ようやく、青年が口を開いた。

「ここは、客人からもたらされた食材を、最高の調理でお出しします」

「……それは聞いている。私が差し出したのはあの林檎だけだ」

話を通じてないのかと、青年は同じ言葉を返した。その言葉一つ取っても、彼が焦っているのはわかる。

だからこそ、執事は、己が主の主張を受け入れてもらうために、絹糸のように滑らかな声を紡ぐ。

「調理はその一品で完結するものではありません。それまでの空腹具合、舌に残る味、室温に湿度、言わずもがな食器や演奏まで、全てを突き詰める。それが我らが姫の信念であり、求めるものであり、差し出すものです。それが提供できないのであれば、姫は調理する意味を失くします」

執事が言葉を発する間、少女の翡翠の瞳がずっと向けられていたが、一度も淀むことがなかった。

この台詞を言い慣れている証左でもあるし、心からの言葉であることの証明でもある。

青年はまた押し黙った。奥歯を噛みしめている。

そして、何も言葉を発することなく、カップに口を付けた。

カフェオレに似た苦味と甘味が口に広がり、あとからアルコールの香りが追ってくる。口当たりはなだらかで、その液が触れる唇も舌もほのかな温かさに、緊張を彼の意思とは関係なく緩めていく。

カルーア・ホット。

凍え死ぬような吹雪を抜けたもの、その決意に強張る体と心を解きほぐし、食事を楽しむ余裕を与えるために出された食前酒だ。

青年が、ほとんどひと息にアペリティーヴオを飲みきったのを見て、少女は喉を鳴らした。

くきゅるる、と少女のお腹が鳴った。彼女も随分と気を張っていて、そしてそれが緩んだらしい。

青年が口をしただけで、目の前のカップへの警戒心を和らげるほどに、彼女は彼を信頼しているようだ。

「どうぞ、貴女も召し上がりください」

スツと、執事は手のひらを見せて少女に食を勧める、ちらりと、少女は執事を見やり、テーブルの上のカップを見つめ、そして青年へ目を向けた。

青年はこくりと頷く。

それを見て、少女はちびりとカップに口を付けた。

甘い。ホットココア、ミルク多めで砂糖もたっぷり。

おいしい。

そう感じてくれたのが、少女はぐびぐびとカップを逆

さまにする勢いでそのアペリティーヴオを飲み干した。

*

執事はその様子を見届けることもなく、少女が一口カ
ップを傾けた時点で食堂を後にしていた。

「流石ね。ありがとう、ファイオーレ」

執事が厨房に入ると、姫から端的ながら心の籠った感
謝の言葉で迎えられた。

「いえ、貴女が手をかけたもの、その一品でもそこなつ
たら、私が給仕する意味がありません」

執事は迷うことなく盛り付けの終わった二枚の皿を手
にして踵を返した。

アンティパストは青年と少女、それぞれの二口分で装
われた三品。

ホウレンソウのチーズ焼き、オニオンとイワシのマリ
ネ、キノコのニョッキ。マリネ以外の二品は、軽く湯気
が立っている。

執事はカートを押して食堂までは早足で廊下を抜けた
が、食堂の門を開く時には、優雅、という言葉を纏う緩
やかさを取り戻していた。

青年と少女の前へ、アンティパストの皿を差し出した。
それから、フォカッチャがいくつか入ったバスケットを

テーブルの真ん中よりは少女寄り、グロリオサの花びら
が触れるか触れないかくらいのとこに置く。

今度は、青年もすぐに前菜へフォークを刺した。

少女もそれに倣い、そして口にフォークを入れる度に
目を微かに煌めかせる。

特にニョッキは好みのように頬を緩ませていて、マリ
ネはフォークに多く乗せて口に入れてしまった時は目を
ギョツとつぶっていた。

*

その間に、厨房は静かに戦場となっていた。

姫はそこで孤独の闘いを強いられる。

今日、特に気を使っているのは、熱の加え具合だ。

火が通り過ぎないように。

しかし、しっかりとその熱で体を暖められるように。

ブロードに突っ込んで煮込んだ鴨肉のロースを、姫は
引き上げた。

分量を同じだけ、二つの塊を切り出し、片方は脂身を
包丁で六往復だけ削ぎ心持ち薄めに切り、もう片方は厚
めに切る。

その切った鴨肉を深皿に半分敷き詰め、カヴァタッ
ピ・パスタと野菜を加えて煮込んだブロードを流し込み、

残った鴨肉を乗せる。

パセリを振りかけたところで、執事が厨房に入ってきた。

「プリモ・ピアット。鴨のブロード仕立てのミネストラよ。熱々だから、ゆっくり食べるように言っただけね」

「かしこまりました」

執事は四つ折りにしたナプキンを手に乗せて、その上に皿を取る。四重の布越しでも、確かに熱を感じた。

執事は二つの皿をカートに移して、水差しも一緒に運ぶ。

執事が食堂に戻ってきた時には、アンティパストの皿はどちらも空いていた。

水は、少女の方だけ二口分だけ減っている。

執事は脇から少女のグラスを取り、水差しから水を足した。その後、音を立てずにグラスを戻し、水差しはテーブルの端にあるコースターの上に置いた。

そのまま流れるように、空いた皿を二枚下げる。

「鴨のブロード仕立てのミネストラです。熱くなっていますので、注意してください」

姫の言葉を確かに代弁して、執事は鴨肉の薄い方を少女の前に、厚い方を青年に差し出した。

今度は少女の方が先にスプーンを手に取り、掬われた。パスタ、カヴァタツピを掬う。

口に入れようとして、立ち上る湯気がそれを妨げた。火傷するかもしれない。

そう頭よりも先に反射神経が反応したのだから、不自然な機敏さで、少女はスプーンを運ぶ手を止めた。

そして、恐る恐る息を吹きかける。

少女が何度も息を吹きかけ、口に入れようとしてまた戻している間に、青年の方は変わらず黙々とミネストラを口に運んでいた。

それはまるで、熱さなど感じていないかのような仕草だ。

その様子を見守っていた執事は、少女がミネストラを半分食べ進めるうちに、あと数センチまで減ったグラスの水を継ぎ足してから、また厨房へと向かった。

そこでは、ちょうど姫がパン粉をまぶしたイノシシ肉のフィレを熱した油へ流し入れていた。

「姫、あと八分から十五分ほどで、プリモは上がりそうです」

「そう。ひと息入れて、ちょうどいいくらいかしら？」

「はい。なにか飲み物を出しますか？」

執事の問いかけに、ここで姫は押し黙った。

それは揚げ物を注視しているようでもあるし、物思いに耽っているようでもあった。

「女の子の方に、ジュースを出してちょうだい。オレンジ」

ジのか……なければ、白ブドウのを」

「それでは、カリカッテのものを、雪で冷やして出します。先に出しても？」

「ええ。フィオーレがまた来るまでに盛り付けておくわ」
姫の指示を聞き終えて、執事は小さな桶を手にして外へ出た。

雪を入るだけ桶に詰め込み、カンテイナーへ降りて、目当てのボトルを引き抜いた。

雪へ突っ込んで冷温を保ち、食堂へ向かう。
皿を見れば、青年のものは既に空いており、少女の方は、残り二割弱と言ったところだった。

少女のスプーン運びは、少し緩慢になっているようだ。
「どうぞ。白ブドウのジュースです」

新しいグラスを雪の中から取り出し、その結晶が纏わって白く息づくままに少女の前に置いた。そこへボトルの中身であるうすく黄色に色付いた透明の液を静かに注いだ。

ぺこりと、少女が頭を下げてきた。

どうやら、少しでも心を開いてくれているらしい。

執事は微笑みでその札を受け入れて、また厨房へ戻る。
セコンド・ピアットとなるイノシシのコトレッタは黒ずんだ葡萄酒のソースがかけられていた。

執事の到着とともに姫の手が止まる。

流し目だけが執事に送られる。

執事はすぐに二枚の皿を運ぶ準備をする。手に取るその刹那で、一枚はもう一方の半分の大きさであることを確認してから。

当然、コトレッタが半分の方は白ブドウのジュースを美味しそうに飲み干した少女へ給仕し、もう一方は青年に給仕する。

青年は皿が差し出されるとすぐにナイフとフォークを持ち、さくりと音を立てて、切り分けた。

その様子を見ていた少女は、目を輝かせ、自分も真似をしてみた。

しかし、そのナイフは切ろうとしても衣を滑り、ぐしやりと断面がつぶれてしまった。

少女の顔は青褪めて、そしてぱくりと口にコトレッタの破片を放り込み、青年と執事と、順番に様子をうかがってきた。

当然、その一部始終は二人とも———それどころか厨房の姫と魔法使いにまで———はつきりと見られていたのだが、目の前の二人はそれを少女に悟られないように振る舞えるだけは大人だった。

少女は、あからさまにほっと安堵の息を吐くと、改めてまたナイフを握って、綺麗に切ろうと挑戦し、しかしその挑戦はコトレッタがなくなるまで最初から数えて

三回行われたが、三回とも無惨に失敗した。

少女がすっかり意気消沈したそのタイミンで、姫が雪の盛られた硝子の器を手にして食堂に入ってきた。

「メインは、もう少し考えるべきだったかしら」

くすくすと笑いながら、姫は少女を見やりつつ、雪の盛られた器をテーブルに置いた。

その言葉をかけられた少女は、面白いほどに顔を真っ赤にしている。

「いえ、どれも……どれも本当に美味でした」

青年の言葉は、その文字通りの感慨深さを湛えて、心からの想いを表現したのだとありありとわかった。

そして、始めから変わらない、決意のまなざしを、その影に懇願を落としながら、姫にまた向けた。

姫は、わかっていているというように、頷く。

姫はその白い左手を、さらに白い雪の中へと差し入れた。

そして雪を崩してテーブルに溢しながら、その中に納めていた黄金の林檎を取り出した。

執事が一本のペティナイフを姫に手渡した。

スツと、見た目は全く黄金であるのに、その硬質さと裏腹に容易くナイフの刃はその実に潜り込んだ。

シャク、シャク、と小気味良い音を立てて、姫は林檎切っていく。皮の付いたまま、一ミリを越えない薄さで、

まずは五枚を小皿に分けて、姫が手ずから少女へ差し出した。

そして姫は青年に目を向ける。

「貴方の分は？」

「いりません。どうか、報酬として召し上がりください。私が今お返しできる唯一のものです」

「……そう。じゃあ、いただくわ」

姫は味見という程度、限りなく薄く反対が見えるくらいに林檎を切って、口へ運んだ。

そしてまた林檎を切る手を進める。

「早く食べないと、山になってしまうわよ」

姫の手さばきに見入っていた少女は、声をかけられてハツと自分の前の皿に目を落とした。

でも、すぐには食べなくて、青年のほうをうかがっている。

「食べてほしい」

今までで、一番力強い声だった。はつきりと、青年は少女に願った。

それを受けて、少女は切られた林檎を摘まんだ。

ひやりと冷たい。光を反射してだとは思いますが、でもこれ自身が光っているように、黄金の林檎はその切れ端までまぶしい。

今更ながら、この林檎はそれまでの技巧と知恵の尽く

された料理とは違って見えた。

なんといつても、これはただ切っただけだ。火が入れられた訳でも、ソースのような添えものがあるわけでもなくて、今まさに目の前で、この上なく綺麗な手付きで切り分けられただけ。

それでも差し出されたものは、そのまま食べるくらいには、少女は素直であり、きちんと食べ物ありがたいがたがるといふ躰が行き届いていた。

そして口にした途端、自分の浅はかさを知る。

冷たい黄金の林檎は、まさしく氷のように、素敵な歯触りだった。

冷えても甘く、爽やかな冷たさが口の中にうずくまっていたこれまでの料理の名残を取り払って、新鮮さが口中に広がった。

噛んで、舌に転がった凍った粒が、溶けて、とろけて、甘い蜜へ孵って、美味しい。

すごく美味しい。

ただ凍り付いて歯が立たないのでもなく、溶けきったただの果実なのでもなく、砕かれたシャーベットでもなくて、もちろん焼かれたのでもなくて。

この黄金の林檎の菓子氷は、今までのどの料理よりもシンプルだけど、間違いなく今までのどの料理よりも美味しかった。

「美味しいでしょう？」

姫が少女に問い掛ける。

いや、それは問い掛けというよりも、講義だった。

「料理の決め手は、どこまで行っても愛情なのね。その林檎の菓子氷の調理法は、極寒の中で凍らせてから、解凍すること」

姫は、少女の視線を促すように、青年に視線を送った。

「それは、彼が貴女をここに連れてくること、それ自体が調理になったということ。生きてほしい、生かすんだ、その決意で取った行動の中で、引きだされた美味しさなのよ」

気づけば、姫は黄金の林檎を全て切り終えていた。

執事はペティナイフを姫から受け取り、食堂から出ていった。

「それでも、それを最高のタイミングで出してくださいっなのは、貴女です」

青年は、それだけ言って、黙った。

少女の前には、林檎が全て皿に盛られていた。

少女は青年を見つめる。

青年は、ひとつだけ頷いた。

少女は、食べた。

一切れ、一切れ、噛みしめるように、黄金の林檎の菓子氷を食べ進めた。

それを、姫と青年と、二人で見守った。

そして、少女が最後の一切れを、涙を流しながら飲み込んだ、その瞬間に。

がくり、と青年の体から、なんの前触れもなく力が抜けた。

それを、姫は知っていた。

それを少女は聞かされていた。

それは、青年の死だった。

「一口でも食べれば、マキナと言っても生き長らえたでしょうに」

苦々しく、姫は押し殺しきれずに声をもらした。

少女は、ただ涙を流して、立ち上がった。

少女の手が、青年に触れる。

もちろん、反応はない。

少女は青年を揺らした。

力を亡くした青年の体は、少女のその気がない力だけで崩れ落ちて、床に転がった。

少女の喉から、叫びが絞り出されそうになり、飲み込んだ。外に出ていくよりも遙かに凶悪な振動となつて、それは少女の内で氾濫した。

「あ……ああ、あつ」

姫は少女を抱きしめた。強く抱きしめた。

その声が漏れださないように。

きつと、泣いてはいけないと言われていたのだろう。だから、泣いていると誰にもわからなければ、泣けると信じて。

泣かなければ、この少女の心は決壊してしまうと思つたから。

そして。

食堂には、少女の声は響かなかった。

ただ、姫の胸に叩き付けられた。

*

深夜に、姫は自分の寝室でベッドに腰かけていた。

重そうに頭を左手で支えて、俯いている。

そこに、執事が入ってきた。

「ひとまず、寝かし付けました」

「そう」

短いやりとりが全てだった。

執事は姫の隣に腰かけ、姫の頭を自分の肩に乗せるように引き寄せた。

「お疲れ様でした」

ねぎらいには、沈黙が返ってきた。

結局、あの後にあつたことと言えば、たとえ不死になつたとはいえ、子どもをこの吹雪の中に放り出すことな

んでできない、面倒を見る、ということだけだ。

けして老いることのない、機械仕掛けの人類であるマキナであったあの青年は、農夫が後日埋葬することとなった。

老いない代わりに、マキナの死はいつも、予定調和で唐突だ。止まるその時間が秒単位でわかっていながら、どうしようもないのだ。

全くもって、やりきれない。

「今日は、空腹なのではないですか？」

それは、執事から差し出した了承の言葉だった。

姫は耐え切れず、執事の喉に、牙を突き刺した。

ごくり、と姫の白い喉が鳴り、上下する。

口に広がる、甘美な鉄の味と命の熱さ。

料理の決め手は、どこまで行っても愛情。

自分で告げたの言葉の意味をはつきりと実感して、姫は熱く、大きな滴を瞳から溢した。溢し続けた。

*

この屋敷では、あらゆる食材が最高の料理となって出てくる。

この屋敷の主人は、至高の料理人なのだ。

そして、この主人たる姫は、自分で調理したものほ

とんどを摂取することができない、吸血を生態として持つ人種なのだ。

だから、外の人間は騙る。あの森で行方不明になった者は、吸血の姫に魅入られて、その食糧になったのだと。けして近づいてはならないと。

Primo tavola una pausa.

参加者一覧（掲載順）

篠田くらげ(@samayoikurage)

朝食はパンか、ご飯か。この長年にわたる争いに決着をつけることができたな、と自負しております。1ページかよ！と思われたあなた、くらげ先生の次回作にご期待ください。次は「目玉焼きには何をかける？」をテーマにしようかなあ、しないんだらうなあ……。

笹谷香菜(@sstnkn)

喫茶店でお茶とかが好きです。

古井久茂(@fulidom)

個人サークル Fulidom 代表の古井久茂です。

我々はいつまで個人サークルでなければいいのか毎夜毎夜枕を濡らしております。新規メンバー募集中です。

小説や短歌の依頼も受け付けています。あなたの依頼をお待ちしております。ページを開けばそこにいる、古井久茂でした。

豆崎豆太(@qwerty_misp)

創作×ご飯電子雑誌 companio 始動やっほう。サークル参加およびゲスト参加、いつでもお待ちしております。

ボンゴレーノ麴(@peperoncino_k)

この度はお誘い頂きありがとうございます。リーマンと幼女という自分のな

推しの組み合わせが書けて楽しかったです。幼女のお弁当を食べる、くたびれたリーマンは駄目ですか?????

中森つん(@N2_tsun)

ギャラクシー船団のお茶汲み係は貴族です。正しいお茶を皆様にお届けするために、日々精進を怠りません。ぜひ皆様もお越しください。銀河の果てまで
☆ミ

巫夏希(@natsuki_miko)

食べ物がおいしくてかわいい人だったら、もう言うことなしなんじゃない？
的な考えから始まった本作（半分嘘）でしたが、いかがだったでしょうか。次回はまた別の食べ物をテーマにしようか、別のところで書いてる喫茶店のお話の外伝にしようか…ちよつと検討中です。次も読んでお腹が空く様な話を書け

ればいいなあ。

奈月遥(@you_natskey)

逆ハーが書きたかったんだ、オレハワルクナイ！ なお、最初に思い付いたイケメン狩人は1文字も登場してない模様。第2話以降に出るかもしれません。現場からは以上です。